

平成紙



おりおりの記

「戦後70年」日本経済の回顧

公益財団法人 資本市場研究会
理事長

篠沢 恭助

今年は「戦後70年」に注目が集まっています。私自身は終戦時に国民学校3年生で、まだ子供でしたが、玉音放送、完全に焼土と化した跡のトタン張りのバラック、あつという間に立ち上った闇市の盛況、無数の戦災孤児、復員兵と進駐軍GIの対照などの重い体験は、一生忘れることがありません。

しかし、70年という年月はあまりに長く（明治維新から私の生れた昭和12年（1937年）までの長さが丁度70年です）、いつまで「戦後」という括り方をするのか、戦後に戦争のケジメをつける機会がうまく見付けられなかったから、仕方がないのかな、などと思っています。しかし、大切な機会なので70年の間のわが国の経済に係わる多くの出来事の中で、私の印象に残ったものを拾い上げてみました。なお日本を高水準の付加価値国家に押しあげた産業・金融・技術研究の各界の活躍のことは、ここでは触れません。

①戦後復興から高度成長までの戦後期

戦後インフレ→預金封鎖・新円切換え(1945-46)、ドッジ・ライン→デフレ(49)、朝鮮戦争→特需による好況到来(50)、対日平和条約発効で独立回復(52)、神武・なべ底・岩戸景気(56~59)を経て「所得倍増」(60)→高度成長開始、東京オリンピック(64)、OECD加盟(64)、証券不況(64)→「国債を抱いた財政」への転換(65)、GNP世界2位(67)、人口1億人突破(67)、いざなぎ景気(69)、大阪万博(70)、列島改造論(72)。

②安定成長への指向と国際摩擦の時代

ニクソン・ショックで1ドル360円に終止符(71)、第1次石油ショック→狂乱物価→不況

→赤字国債発行開始(73~75)、第2次臨調(80)→3公社民営化(85~87)、プラザ合意(85)→円高進行(87年150円、94年100円、95年79.75円)、激しい日米貿易摩擦(80年代前半・同後半)、円高デフレ→財テクブーム→資産バブル大発生(80年代後半)＝株価ピークは日経平均38,915円(89大納会)。

③負の遺産との闘いの時代

株価暴落(90~)・不動産バブル崩壊、住専・金融機関の不良債権問題深刻化(95~)、拓銀・山一・日長銀等の破たん(97・98)、公的資金投入(95・98・99)、低成長とデフレの長期化、米国住宅バブル崩壊→リーマン・ショック(2008)、人口減少が始まる(08~)、東日本大震災(11)、アベノミクスと日銀異次元QQE開始(13~)、日本の公債残高(国・地方)1,000兆円超え(15)。

70年を通観して、敗戦からの立ち直りだけでなく、その後の国際政治・経済の波にもまれ乍らも引続き相対的高レベルの生活・経済水準を維持しつづけた国民の対応能力の高さに改めて感心します。

しかし、これから先、エネルギー問題、地球環境問題、人口減少、財政危機等の重大課題に直面する次の世代の皆さんの苦労は、これまでの70年を超えるものになるでしょう。中国の伸張などの重圧もさらに高まる中、生起する問題への対応だけでなく、これまで以上にイノベーション能力を振起し、イニシアチブをとり、引続き存在感のある日本を作り続けて頂きたいと、心からエールを送りたく思います。